

## 特集

# 課外自主活動における学生の成長

— ワークショップによる成長調査を通じて —

今川新悟・河井 亨  
真田樹義

### 要 旨

近年、学生が学び成長する場は、正課教育に留まらず正課外にも広がっており、実践的及び政策的な関心は高まってきている。また、正課外での学生の学びと成長の体系的な理解に向けた研究が蓄積を見せている。

本学では、正課、課外活動などの枠を超え、学生生活全体を通じて学び成長する教育の仕組みづくりに向けて、「学生育成目標の構築」や「具体的な学習支援の検討」などを進めてきており、学生の活動内容や成長過程など学生実態の把握が不可欠となっている。

そこで、課外活動における学生の成長過程を把握するために、学生部・教学部の部を超えた協同プロジェクト「成長調査プロジェクト」を立ち上げ、学生の課外活動での学びや経験などの調査を実施している。本稿では、開発された成長調査の「調査方法」兼「ふりかえり支援」の方法と学生たちが書き出した「身についた力」と学生が語った「身についた力」のエピソードを中心に報告する。今後に向けては、課外活動における学生の成長プロセスを調査した上で、「成長モデル」の作成を進め、学生実態に合わせた支援プログラムの体系化・充実を目指す。

### キーワード

課外自主活動、学生の成長、ワークショップ、振り返り（リフレクション）

## 1 はじめに

学生が学び成長する場は、正課教育に留まらず正課外にも広がっている。正課外での学生の学びと成長への実践的及び政策的な関心は高く、日本私立大学連盟は『大学時報』において「特徴ある正課外教育で学生を教育する」と題した特集を組んでいる。公益財団法人大学基準協会の2018年からの第三期の大学評価（機関別認証評価）に向けた「点検・評価項目及び評価の視点」の改定においては、従来の「修学支援」「生活支援」「進路支援」に加え、新たに「その他の支援」として、「学生の正課外活動（部活動等）を充実させるための支援」を含めるとしている。

本学では、正課、課外活動などの枠を超え、学生生活全体を通じて学び成長する教育の仕組み

づくりに向けて、「学びの立命館モデル具体化委員会」にて議論を積み重ねてきている。同委員会答申「全学的またはキャンパスを単位とする学習支援のあり方について」（2016年7月27日常任理事会レビュー）および「当面の学習支援政策について」（2017年2月14日教学委員会）において、各キャンパス部会および各学部、各部局で検討されてきた学習支援政策についてまとめられている。また、「当面の学習支援政策について」文書では、今後の課題として、各々が所管する学習支援を連携させ、学生が成長していく支援について、各所での取り組みの蓄積を踏まえて共有・充実をはかることが確認されている。「学びの立命館モデル具体化委員会」では、具体的な学習支援についての議論に加え、「立命館大学の学生育成目標について」（2018年3月2日大学協議会）において、正課・課外の枠を超えた学生生活全体の学生の到達する目標を以下のように構築している。

立命館大学は、「自由と清新」の建学の精神と「平和と民主主義」の教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努めることを教育的使命としています。

立命館大学は、多様なバックグラウンドや個性を持つ学生達が、「Creating a Future Beyond Borders 自分を超越る、未来をつくる」ことができる主体として学び成長していくことを、様々な部署が連携することによって教職協働で支援しています。正課・課外など学生生活全体を通じて、「学びのコミュニティ」の中で相互に学び合い、切磋琢磨し、学部卒業時に次のようなことができる学生の育成を目指しています。

- (1) 多様な価値を尊重し、他者との対話と協働を重視し、「平和と民主主義」の価値観に裏打ちされた自律的な思考と行動ができる
- (2) 幅広い教養と専門性を有し、グローバルとローカルの視点を備え、既存の枠組みや境界を超えた「自由」で「清新」な思考と行動で問題発見・解決ができる
- (3) 自己を理解し、自らの役割や課題を踏まえた責任ある思考と行動ができる
- (4) 「未来を信じ、未来に生きる」高い志を持ち、生涯にわたって学び、行動し続けることができる

## 2 課外活動における成長調査プロジェクト

学生の育成や支援を高度化していくためには、学生がどのような活動において、どのように取り組み、どのような成長を遂げているのかという学生実態の把握が不可欠となる。そのような学生実態の把握に立って、効果的なポイントで支援を実施し、成長に寄与し、成長を加速させる支援を目指している。

本学学生部においては、学生の学びと成長を支援する「Student Success Program (SSP)」を2017年度に立ち上げ、正課と課外活動の両立に向けた支援体制を充実させてきている。SSPの「成長支援」においては、学生の要望に応じてクラブ・サークル等の組織課題支援やキャリア形成支援、会計研修といった企画を実施してきた。そのような支援を高度化していくためには、学

生の成長の実態を踏まえた実践としていくことが必要となる。

学生部が支援対象とする学生の活動としては、体育会や文化・芸術活動といった課外自主活動団体（クラブ・サークル）をはじめ、学生の自治活動（学友会・自治会など）やピア・サポート活動、学部の専門的な学びを活かした学部プロジェクト団体の活動、自主ゼミ（学部・教職）だけでなく、「+R 校友会未来人財育成奨学金」および「学びのコミュニティー集団形成助成金」といった、成長支援型奨学金に採用されている学生の活動も含んでいる。

表1 調査対象カテゴリー

①体育会
②文化・芸術
③自治活動
④ピア・サポート
⑤学びのコミュニティー集団形成助成金
⑥ +R 校友会未来人財育成奨学金
⑦専門系（学部プロジェクト団体等）

それらの活動を縦割りにするのではなく、活動横断的に学生の成長の実態把握をする必要があるという課題認識から、課外活動における学生の成長過程を把握する調査を実施するために「成長調査プロジェクト」を立ち上げた。プロジェクト体制は、学生生活を管轄する学生部の教職員を中心としつつ、教学を担当する教学部からも教職員が参加する協同体制をとっている。調査結果については、R2020 後半期計画で実施してきた学生部による学生支援方策の効果・検証およびR2030 中期計画における学生支援政策を検討する上での資料として活用することを想定している。最終的には、課外活動における学生の成長モデルを作成し、支援プログラムの体系化・充実を目指すものである。

本稿では、成長調査プロジェクトの活動の結果として、開発されてきた「調査方法と考え方」、調査の結果のうち学生が書き出した「課外活動で身につけた力」について報告する。

### 3 調査方法＝ふりかえり支援方法と考え方の開発

「活動横断的に学生の成長の実態把握をする必要があるという課題認識から、課外活動における学生の成長過程を把握する」というプロジェクトの目的のもと、調査の目的が設定された。第一に、学生の成長過程の実態を把握するために、質問紙を用いた調査に着手するのではなく、学生自身の声を聞く活動を行うこととした。質問紙を用いた調査によって、広く学生の意識を把握することは重要ではあるものの、課外活動での成長を把握する視点や枠組みや概念が明確かつ体系的に整備されていない現状に鑑みて、質問紙調査に至る前の段階を丁寧に進めることが重要であると判断された。また、学生の成長過程について、プロジェクトを組んで知見を共有しながら進めることで、学生支援を担当する教職員が支援の力量を形成する実践とすることも企図された。第二に、学生の声を聞く活動として、一對一の面談を行うとすると、相当の時間とエネルギーを割くこととなるため、一定の効率が重要と判断された。また、第三に、大学のために調査を実施するのではなく、学生の声を聞く調査に参加することで、学生たちにとっても成長の機会となる

ような場のデザインが重要であると考えられた。以上のことから、異なった活動に取り組んでいる学生たちが場を同じくし、それぞれの成長過程を語り合ってもらおうワークショップという方法が選択された。学生たちは、自らの体験と成長を言語化することでふりかえり、省察する機会とすることができ、また異なる学生の取り組みの語りを聞くことで自らと照らし合わせたり、自分には無い視点に気づいたり、自分がこれから伸ばしたいことに気づいたりする機会とすることができると想定された。実際上の理由から、担当職員から連絡のつきやすい各団体の執行部経験のある学生たちに連絡をしたり、窓口に来てくれた学生に声をかけたりし、ワークショップの場に参加することを求めた。また、大学生活の課外活動を通じた成長経験を語ってもらう上で、一定の経験年数を必要とするため、3 回生以上を対象とすることとした。

ワークショップは、はじめて顔をあわせる学生同士となるため、徐々に話していく量が増えていくようにデザインした。はじめに司会者の自己紹介と趣旨説明を行った。また、ワークショップの場でのデータの利用許諾について説明し、諾否の記入を求めた。そのあと参加者の自己紹介として学部・回生・名前・課外活動名と役割等を話してもらった。その際、学生たちだけでなく、教職員が複数参加するため、学生たちの自己紹介の前に場をあたためてもらうために、教職員からも自己紹介とその場への期待を話してもらった。

表 2 ワークショップ実施概要

調査目的	全体：活動横断的に学生の成長の実態把握をする必要があるという課題認識から、課外活動における学生の成長過程を把握する 学生：自らの活動を語り、また他の学生の経験を聞き、ふりかえりと省察を通じた成長の機会となる 担当者：学生の経験を通じた成長に対し、効果的に問いかけやフィードバックができるようになる
参加学生	各団体の執行部経験のある学生（3 回生以上）
場所	学生オフィス内打ち合わせスペース
時間	90 分
ワークショップの流れ	(1) 趣旨説明・自己紹介 (2) 「身についた力」の書き出し (3) 「身についた力」の貼り付けと一言説明をローテーション (4) 「一番身についた力、一番伸びた力」について順にトーク（+問いかけ） (5) さらに伸ばしたい力の説明 (6) 後輩の成長はどう見えるか (7) ワークショップの感想と今後

続けて、学生の成長について語ってもらう活動に進んだ。ただし、唐突に「どのような成長をしたか」を語ることを求めると、戸惑うことが予想された。また、今までの成長が即座に想起されないことも予想された。学生によっては、リラックスする前に語ることを求めては、本来の成長について十分に言語化できないことも考えられた。そこで、「いきなり“どんな成長をした？”と聞かれるとうまく話せないかもしれないので、自分の課外活動での活動をふりかえってどういった力がついたかを洗い出す作業をしましょう。用意したポストイット一つにつき一つの力を記してください。できるだけたくさん記してください」という説明のもと、どういった力がついたかを書き出してもらった。学生ごとに色の異なるポストイットを用意し、誰がどういった力を

挙げたかを事後的に把握できるようにした。ポストイットに書く際は、書きやすさを重視して、「〇〇力」のような形態で書くことを求めたが、それ以外にも「〇〇性」やオリジナルな言葉で表現してもよいことを付言した。さらに、回を重ねる中で、「だいたい10個とか、今までで最大14個だった」と伝え、書き出す数を競うゲームのように取り組んでもらえるようにした。その一方で、「たくさん出なくても心配ありません」と安心感を持ってもらえるようにした。

次に、書き出したポストイットを一人一つずつ模造紙に貼り出してもらった。貼る際に、「『〇〇力』はどんな力か、主体性やコミュニケーション力と言っても、その内容はいろいろだと思うので、その力がどんな力か一言だけ説明を加えてください」と付け加えた。また、「他の学生さんも、説明を聞いて、同じかまたはとても似ていると思ったら近いところに貼ってってください」と求めた。ワークショップの初期には、このタイミングで1つ1つの力について聞いてしまうこともあったが、そうすると時間が足りなくなる。この段階では、参加学生が語るウォーミングアップであり、違う活動をしていても似ているところがあることや、他の人の活動について知っていくことを最優先とし、どのような力であるかの説明は「一言、二言」と制限することとした。

一通り、貼り出してもらったあと、一人一人の成長にスポットライトを当てて語ってもらう活動に進む。語り出してもらう前に、「いろいろな成長をしてきたと思うんだけど、これからみなさん一人一人の成長についてじっくりじっくり聴いていきたいと思います。それで、ここに張り出された成長は相互に結びついて関連し合っていると思います。ですが、話してもらう上で、『一番身についた力、一番伸びた力』に絞ってもらって、話のとっかかりにしてもらいたいと思います。どれか、一つ絞ってもらえますか。話していく途中で他の力が出てくるのはなんら問題ありませんので」と説明した。ワークショップの初期には、「みなさんの成長の柱となる力」という表現をとっていた。話しやすさではなく、成長の中でも大切な力に焦点を当ててもらいたいという意図からであったが、「柱となる」という表現は語りを分析する際に用いるには適しているが、実践の場で学生に示す表現としては分かりにくさを生むため適していないことがわかった。また、「一番身についた力、一番伸びた力」という表現で、学生自身にとって些細な意味しかないものではなく、重要な意味づけの与えられた力が選ばれることが観察されたため、学生への教示の表現を修正した。

少し間をとって、一つの力を選んでもらう時間とした。順番は、司会者が指名することもあれば、じゃんけんで勝った学生からスタートすることもあった。以下では、典型的な語りの構造について記述する。参加学生はまず、「自分が一番身についたなと感じる力は～だ」と挙げた上で、その力について先ほどよりも詳しい説明をする。どのような成長過程を経て、そういった力を身につけていったかを自然に語ってくれる場合もあるが、「その力に関して、活動を始めた頃はどのような状態だったのですか」「どうやってその力を身につけていったのですか」といった問いかけをした。成長過程の実態把握のためには、プロセスを細かく区切っていくことが重要となる。最初の頃から時系列に沿って順序良く語ってくれる学生もいるが、要点を絞って簡潔に説明しようとしてくれる意図のためか、最初の頃から現在に飛躍する場合が見られた。その際には、「最初の状態から、その力が飛躍的に伸びたのはいつごろですか」「どういったことがありましたか」「どんな経験をしたのですか」と問いかけることとした。問いかけに対して、「1回生の頃の学園

祭」「新入生向け企画」「1 回生の秋頃の試合」と大きくりに語られることが見られた。その際には、「具体的には、そこでどんなことがあったのですか」「いろいろなことがあったと思いますが、例えば印象的な出来事はどんなことですか」「〇〇の経験について、具体的なエピソードを教えてください」と例示やエピソードを求めて、具体的な場面のところまで具体化するよう問いかけた。さらには、例やエピソードとして出された内容に対しても、「その時どんなことを思ったのですか」「その時に感じたことはどんなことですか」「どういう思いでしたか」といったその場面での意図・思考・感情についても問いかけた。成長過程については、飛躍になった経験、壁にぶつかった経験（障害・困難）、転機になった経験と表現を変えながら、重要な経験を聞き出せるよう問いかけ、その経験に即して上述のように具体化を追求した。そうした具体化に際しては、「なぜ成長できたのか」という成長要因については、できるだけ直接尋ねないようにした。要因の分析を求める「なぜ」という問いは、思考を事態の記述や描写から分析に切り替えてしまい、語りにおいて過去の経験を追跡するモードから、過去の経験に相対して対象化して分析するモードへ移行させてしまう。その結果、複数の思考のモードが時として衝突してしまい、成長過程についての語りを引き出す上では支障となることが少なくない。また、成長要因の自己分析も有効と考えられたが、参加学生が特定した要因が全てというわけではない。具体的な成長過程の語りの中で、何が成長に関わっているかが語られるため、成長要因については学生支援担当者のリフレクションによって特定・分析されればよいと想定される。

さらに、成長過程を多面的に捉える上で、今後の挑戦課題と後輩の成長をどう見ているかを語ってもらった。参加学生にとって、現在の時点が最高点ではなく今後も成長を遂げていく。過去から見て現在を語ってもらうと、現在が最高点となるが、現在から将来を展望してもらうと、現在は通過点となる。そうすることで、成長過程のさらに先を見通した実態把握となる。また、自分たちから見て後輩の成長や不足点をどう見ているかを聞き取ることで、語りの中では十分に語られなかった学生の成長過程が浮かび上がる。過去から現在へ、現在から未来へ、自分自身についてから先輩として後輩の成長についてと成長を語るポジションを変えることで、学生の成長についての多面的な実相が浮かび上がる。

最後に、ワークショップの感想を参加した教職員から述べた上で、学生たちにも語ってもらった。実態把握が全体目的ではあるものの、学生にとってふりかえりと省察の機会となっているかどうか、そしてそれが成長や充実感につながっているかどうかを確認することが重要となるためである。また、今後のプロジェクト活動への参加についても誘いかけた。調査のための調査（調査の自己目的化）や調査と実践のいずれかが手段として収奪するのではなく、調査と実践を同時進行させて相互に支えあう形成的な関係を築くことが重要となる。また、時限付きのプロジェクトとして活動が展開されているものの、平常時の活動に埋め込んでいくことや今後継続する持続可能な形を見出していくことも重要となる。その点では、学生が調査の対象や参加者にとどまらず、学生が自らのために自主的・自立的に場を創り出していき、大学・教職員がそれを支援していくような関係が可能かつ重要となる。

## 4 調査結果：学生が書き出した「身につけた力」を中心に

### 4.1 参加学生について

参加学生のカテゴリ、人数、キャンパスについては表3の通りであった。

表3 ワークショップ参加学生一覧

カテゴリー	キャンパス別参加学生		
	衣笠	BKC	OIC
①体育会		7	
②文化・芸術		23	7
③自治活動		5	3
④ピア・サポート	10	1	
⑤成長支援型奨学金		6	
⑥専門系		7	
合計	10	49	10

参加した学生は、「自分の成長をふりかえることができよかった」と語ってくれ、ふりかえり・省察の機会として機能していたことが確認された。また、「他の活動をしている学生の話聞いて良かった」と交流の機会としても有意義であったこと、「自分の団体の他の学生にも紹介したい、誘いたい」と場を広げていく意義についても参加学生から認められた。実際、このような「ふりかえり・成長」の語りを聞く機会の意義を認めた学生が、次の回のワークショップに参加していくという連鎖反応が見られた。

また、本成長調査＝ワークショップの方法は、最初期には河井が試行的に実施し、その場を参観することで、他のプロジェクトメンバー（教職員）が実施していくことをねらいとしていた。その後、他の教職員によるワークショップが各キャンパスで実施された（衣笠3回、BKC13回、OIC2回）。今後は、実施報告と合わせ、実施した教職員のふりかえりと経験則の言語化・実践知化を図ることが重要となるだろう。

### 4.2 学生たちが課外活動で身につけた力

学生たちがポストイットに書き出した「身につけた力」は、表5のように整理できる。コミュニケーション力やリーダーシップといったありふれた言葉で概念を捉えるものから、立命館の学生成育目標との関係では、下級生に対する「仏の心力」やイノベーションを意味する「0→1力」といったユニークなものまで見られた。電話対応力や仕事の分配といった細部の成長をきめ細やかに捉える視点を学生たちが持っていることにも意義がある。抽象的にコミュニケーションという語で片付けるのではなく、具体的な実践と経験に裏打ちされた形で身につけた力が書き出された。また、表4の結果は、学生の課外活動を通じた成長は、多岐にわたる立命館大学学生成育目標と関連するだけの広がりを持っていることが示されている。

表 4 「課外活動で身についた力」一覧

学生育成目標 (2018年3月2日大学協 議会)	学生育成目標から抜き出し た項目 *筆者が振り分けを行った	課外活動で身についた力 *筆者が振り分けを行った
(1) 多様な価値を尊重し、 他者との対話と協働を重 視し、「平和と民主主義」 の価値観に裏打ちされた 自律的な思考と行動がで きる	多様な価値観	社会適応力、受容する力、相手の立場になって考 える力
	他者との対話と協働	コミュニケーション力、統率力、会話力、聞く力、 プレゼン力、協調性、チームワーク力、交渉力、 発信力、伝達力、説得力、仲間と連携する力、電 話対応力、コミュニティ運用・形成力、交際力、 話し合う力、サポート力、他人を思いやる力、周 りを信頼する力、気配り・気遣い、寛大さ、寛容 さ、愛想、柔軟力、仏の心力
	自律的な思考と行動	行動力、積極性、実行力、セルフマネジメント、 能動的な活動する力、主体性、自立、自主性、計 画力、スケジュール管理、時間管理(タイムマネ ジメント)、判断力、決定力、先を見て行動する 力、決断力、物事を整理する力、優先順位、学 業・部活動との両立、リスクマネジメント力
(2) 幅広い教養と専門性 を有し、グローバルと ローカルの視点を備え、 既存の枠組みや境界を超 えた「自由」で「清新」 な思考と行動で問題発 見・解決ができる	グローバルとローカルの視 点を備える	客観視する力、異文化理解、視野の広さ、俯瞰力
	既存の枠組みや境界を超え た自由で清新な思考と行動	チャレンジ精神、企画力、想像力、生み出す力、 アイデア力、発想力、創造力、新しいものを作 る力、コラボする力、イノベーション力、好奇心 力、0→1力
	問題発見・解決	論理的思考力、臨機応変に対応する力、リサー チ力、分析力、トラブル解決力、課題発見力、理解 力、情報収集力、問題処理能力、知識探究力、突 破力
(3) 自己を理解し、自らの 役割や課題を踏まえた 責任ある思考と行動がで きる	自己理解	自己分析、自分に向き合うこと
	役割理解・課題理解	観察力、課題解決力、仕事の分配、調整力、議論 の仕方、認識力、人材割り振り力、要求の分析、 ニーズを汲み取る力
	責任	リーダーシップ力、指導力、マネジメント力、責 任感、人を動かす力、指揮する力、管理する力
(4) 「未来を信じ、未来 に生きる」高い志を持ち、 生涯にわたって学び、行 動し続けることができる	「未来を信じ、未来に生き る」高い志	発言力、表現力、影響力、努力を続ける力、熱い 気持ちをもつ力、極め力、やり遂げる力
	生涯にわたって学ぶ	楽しむ力、ポジティブシンキング、感謝、マナー スキル、ほどよくさぼる力、好きなことをする力、 力をぬく
	行動し続けることができる	忍耐力、あきらめない力、モチベーション管理、 集中力、根性、精神力、ストレス耐久力、自分の 精神を保つ力

最後に、どのような力が身についたかという学生のエピソードをいくつか紹介する。

#### ➤ 体育会 (体育会本部)

先輩の代は何を行うにしても、構想を練ってから時間をかけて、実行する人が多かったように感じる。いつになったらそれを実行するのかという感覚であった。自分はもともと考える前に行動するタイプであるので、自分の代では考えることも必要であるが、まずは行動してみようと思



いさまざまなことを実践した。その中の活動の一つとして“琵琶湖清掃活動”を実施したが、はじめは他のメンバーにも賛同を得られていなかった。しかし、「体育会はマナーが悪い、地域の人に迷惑をかけている」というイメージを払拭したかったため、組織における課題や目標を具体化し、企画の必要性を周りのメンバー一人一人に対して丁寧に説明し、少しずつ理解してもらった。また、実際に清掃活動を実施するために、「清掃活動の現場に直接出向き交渉しよう。」と思い、手当たり次第、清掃場所の候補地を訪問し交渉し続けた。そのような経験を通じ、さらに「行動力」が身に付いたと感じた。

➤ ピア・サポート（オリター）

オリターは曖昧な目標（1回生の成長等）ばかりで、部活のように団体戦優勝など明確にわかる目標がない。そのため、何を目指し活動をするのが難しかった。企画を実施するにあたり、「1回生のために何が出来るとか」を考え、具体的な目標を立てるためのミーティングを何度も重ねたが、これといった正解が見つからなかった。自分たちの活動が、本当に1回生のためになっているのかわからず、自己満足で終わってしまうところがある。2回生前期時に経験したオリター活動の中で、他のオリターとのトラブルがあったが、所属していたオリター執行部がうまく解決してくれなかった。立ち直れないほどの大きな経験であった。しかし、その経験があり、自分が団長になり、執行部として活動する中で、全体のことを考え行動する組織にしようと思った。現在、その思いを形にするために、団長としてオリター一人ひとりの気持ちを考え行動することが出来ている。

➤ 成長支援型奨学金（学びのコミュニティ集団形成助成金）

自分のできることは限られており、他の人の長所と自分の長所をかけ合わせて活動したほうが何倍もの力になると思っている。話し合いをしながら相手の長所を理解し、部内で共有し、効率的に前進していけるような、人とのコミュニケーションを重視している。コミュニケーションを取る上で工夫していることは、絶対相手を否定しないことである。考えが違ふのは当たり前で感情的になるのではなく、「次にどうしようか？」等、方向転換するようにしている。そのような日々の活動をする中で一番身に付いたことは、「コミュニケーション力」だと感じる。

➤ 専門系（理系プロジェクト団体）

団体の代表となったが、これまでのように自分の意見を押し通すことを続けていたため、活動の中で部員たちが言いたいことを言えず、不満が溜まってしまった。自分が正しいと思うことを押し付けていたことや相手の言いたいことを引き出せていなかったため、何度もつまづいてしまった。そのうち、誰も自分の話を聞いてくれなくなってしまったので、そこで初めて相手とのコミュニケーションが重要であることに気が付いた。その当時は、団体内でも孤立してしまっても辛かったが、自分が変わらないといけないうことに気付くことができて良かった。

限られた事例ではあるものの、他の学生たちの語りにも共通する特徴がいくつか示されている。第一に、課外活動を通じた成長が、具体的な活動に結びついていることである。具体的な活動

をふりかえって、体験を言語化することで学生たちの成長が明確になり、またそれ自体が学生の成長として学生支援となる。第二に、うまくいかない失敗経験に直面していることである。具体的には、現在の自分たちや自分たちの活動を変えようとする挑戦経験・ストレッチ経験である。その結果うまくいかなかったとしても、その経験を糧とすることで学生が成長していくことができる。第三に、活動をする仲間との関係が成長に寄与していることである。自分一人ではできないことが力を結集することでできる、また目的のある活動であることで「より良い」成果を目指して取り組むことができる、そしてぶつかりあっても目的を目指す推進力があるといった課外活動の特長が、学生の成長に寄与している。第四に、学生の成長は内容豊かなものである。一言でまとめてしまえば、実行力やコミュニケーション能力といった表4に貼り出された言葉に集約される場合でも、それぞれ内容を豊かに伴った力を身につけている。事例に即して表現すれば、価値を生み出すために構想に終始するのではなくまずは行動に移す実行力、失敗に直面しても挫けない力、目的を達成するために仲間一人ひとりの気持ちに配慮する力、自分一人では成し遂げられないことを実現するために相手と関係を築くコミュニケーション力、お互いの言いたいことを言えるようにするコミュニケーション力、組織の活動を進めるために自分も変化させる力などである。

## 5 今後の展望

成長調査プロジェクトは、今後の展開を以下のように計画している。学生の成長をエピソードの豊かさと調和させるように、成長モデルとして学生の成長を区切って捉える成長ラダーを開発することである。そして、そのプロトタイプを用いたワークショップの実施によるモデルの検証と改定を進める。また、今回開発したワークショップによる調査とふりかえり支援を兼用した少人数型ワークショップを日常の活動にすることである。さらに、複数の活動団体が参加して共同でのふりかえり活動のワークショップの実施と成長調査プロジェクトを土台とした量的指標を用いた課外活動調査を計画として視野に入れている。

## Student Development in Extra-curricular Activities Examined Through Workshop-Based Surveys

IMAGAWA Shingo (Staff, Office of Student Affairs at Biwako-Kusatsu Campus, Ritsumeikan University)

KAWAI Toru (Associate Professor, College of Sport and Health Science, Ritsumeikan University)

SANADA Kiyoshi (Associate Dean, Student Affairs, Ritsumeikan University)

Both curricular and extra-curricular activities contribute to the development of students during their university lives. Ritsumeikan University has established "The Ritsumeikan University Undergraduate Educational Mission and Vision" which includes both curricular and extra-curricular domains. Ritsumeikan University has also established "comprehensive student support" in the division of student affairs, which makes it essential to assess what kinds of students engage in extra-curricular activities, how they engage, and how they develop.

The division of student affairs at Ritsumeikan is working in cooperation with the division of academic affairs on a workshop-based survey about extra-curricular development. This project has developed a methodology for workshop-based surveys to assess the effects of such activities on student growth. This report shows the methodology and outcomes from students' extracurricular activities. The future orientation of this project is to assess student development multi-dimensionally and construct a model of student development. Furthermore, the report also proposes to develop comprehensive student support based on these assessments.

### Keywords

Extra-curricular Activities, Student Development, Workshop, Reflection